Vol.40 2001 AUTUMN

木曽川文庫



INDEX.....

AREA REPORT

未曾有の九・二八災害と激特事業

まにJOURNEY

旅人の心が紡ぎあげた太田宿、ゆかりの人物とその文化

LK&TALK

近代における根尾川流域の舟運に携わった船頭たち

木曽川文庫は治水の資料館。

水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、

これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。 今回は木曽川と飛騨川が合流する美濃加茂盆地の中心地、

美濃加茂市から、洪水の歴史や治水事業を中心に、

河川交通シリーズでは、

揖斐川の河川交通を特集します。





国土交通省中部地方整備局 木曽川下流工事事務所

ふるさとの街・探訪記



中山道の宿場町としてひらけてきました。 そして近年では、交通網の整備により、中濃地方の中核都市として発展。 その一方、恵まれた水資源は水害をもたらすことに 古くから木曽川水運の要衝として 木曽川と飛騨川が合流する美濃加茂盆地の中心地が美濃加茂市です。 水防施設の築造は、隣村の対立を招き、争議の原因ともなっていました。

市民・市政が一体となったまちづくりを推進しています。

交通の要衝として発達

の中心地には太田があります。 ライン下りで有名な木曽川が流れ、両川が す。市の東部には飛騨川が、南境には日本 山々に接するあたりに美濃加茂市はありま 合流する付近には美濃加茂盆地が広がり、そ 日本列島のちょうど中央に位置する岐阜 その中南部、濃尾平野が飛騨、美濃の

道の宿場町として栄えました。 太田の渡を擁しており、江戸時代には中山 太田は、かつての木曽川水運要衝の地、

域における有数の内陸工業都市として、ま 屋川・大洞川、中部 た、住宅地域として、成長を遂げています。 濃地方の幹線交通路が集まり、中京工業地 木曽川水系の他にも、 現代はJR高山本線、太多線、長良川鉄 、国道二一号、四一号、二四八号など中 北部の川浦川・廿

光客を集めています っており、多くの観 の始発乗船場にもな 公園日本ライン下り は、飛騨木曽川国定 豊か。また美濃加茂 系に属し、水資源は の蜂屋川が長良川水



牧野小川遺跡の石舗 牧野小山遺跡からは、

二百個以上の石錘が出土しています。 これ 工夫していたことがわかります。 代には川漁が極めて盛んで、漁具や漁法を ていたもの。このことから、数千年前の時 は、魚網などに結わえて重りとして使用し

領主が群立しました。

しかし、永禄八年 (一五六五)、天下統一

承久の乱と大井戸の戦い

曽川河川交通の拠点であったことなど、陸 結ぶ東山道飛騨支路を擁していたこと、 た。 恵まれた水資源により農業が発展した 美濃加茂では大規模な集落が形成されまし こともその要因ですが、他方、都と東国を 六世紀以降、奈良時代の八世紀にかけて

日本ライン木曽川の風景

縄文遺跡から発見された川漁の石器

木曽川と飛騨川が合流する美濃加茂盆地 の段丘上には、縄文

中でも、縄文中期の 発見されています。 かけての遺跡が多く 時代から弥生時代に 通じて重要な地域で があり、縄文時代を 遺跡に特徴的なもの 合流点にほど近い

嘉兵衛は御柿庄屋に任ぜられました。 藩領に移されると、勘解由の孫にあたる岸 幕府が成立し、中蜂屋村が幕府領から尾張 戦の場に。城主岸勘解由は、妻と刺し違え をめざす織田信長の攻略により堂洞城も合 て自害しました。 戦国の世が去って、江戸

太田宿と太田代官所

たがって、美濃加茂の大部分は尾張藩領で、 主要な地域を尾張藩の領地としました。し 江戸初期、幕府は木曽川と中山道沿いの うになりました。 れを汲む土岐氏や蜂屋氏が勢力を伸ばすよ 園が成立し、鎌倉時代には、美濃源氏の流 安時代には蜂屋荘をはじめとした多くの荘 長の原動力であったと思われます。以後、平 と川をつなぐ交通の要衝であったことが、成

敗走。蜂屋入道は自害しています。 も木曽川をはさんで、幕府方と上皇方が対 乱は、鎌倉幕府と上皇の勢力争い。美濃で 的な軍勢を擁する幕府軍の前に、あえなく の一族、蜂屋入道父子です。しかし、圧倒 いに上皇方として参加したのが、美濃源氏 戦した大井戸の戦いがおきました。 この戦 承久三年 (一二二一) に勃発した承久の

考えられており、したがって太田の渡は **重要な役割を果たしていたようです。** 三世紀にはすでに存在。 交通の要衝として 戦場となった大井戸の渡は、太田の渡と

場の位置は次第に上流へ移っていきました。 その後川の流れが変わったことから、渡し なお、この地は現在の中濃大橋の付近で

堂洞合戦と岸勘解由

藤氏、堂洞城の岸氏、朱田城の肥田氏ら、小 土岐氏の没落とともに衰退。加治田城の佐 いきました。その斎藤氏も戦国期になると、 氏の守護代、斎藤氏がその地位を確立して 応仁の乱により戦乱の世に。 美濃国は土岐 鎌倉幕府が滅亡し室町時代を迎えると、

部は幕府領と旗本領でした。

土岐・各務・武儀・可児の各郡の全部もし 事・政治上においても重要な拠点でありま 衝に位置していることから、太田宿は宿駅 名古屋城からも約三五㎞の道程。交通の要 くは一部を支配、政治の中心地となってい 七八一)に太田代官所を置き、加茂・恵那・ した。したがって尾張藩は、天明元年 (| としての機能を求められるだけではなく、軍 太田宿が置かれました。 この太田宿は美漕 にも宿駅制度が確立すると、美濃加茂にも 〒六宿のほぼ中央に位置し、尾張藩の府城 江戸幕府の五街道の整備に伴い、中山道

太田の渡は、中山道三大難所の一つ

地内にありました。 政年間 (一七八九~一八〇一) には下古井 まとっていたようです。また、木曽川の洪 め水流は急で、渡船するのにも困難がつき いうのも、豊富な木曽川の水量に対して川 峠がなくばよい」と歌われたほどでした。と 難所の一つ。「木曽の棧、太田の渡し、碓氷 水による川止めもしばしば。渡し場の位置 幅は広かったとはいえ、水深が浅かったた 太田宿の渡船場、太田の渡は中山道三大 流れの変化により次第に上流に移り、寛

所もその一つ。流 五年 (一六六五) 設けました。寛文 要所に川並番所を る物資を監視する 木の取締りなどを ために、川沿いの 渡を保護下に置く 行ないました。 に設置した太田番 方、木曽川を下 尾張藩は太田の

現在の太田の渡付近

木曽川水系や長良川水系の大小河川が走 洪水と百間土居の争い

> 和・伊深・蜂屋・木野・今泉の諸村に少な の川浦川・蜂屋川も、急激な増水により、三 を及ぼしました。また、同時に長良川水系 田・古井・取組・勝山の諸村に大きな被害 でも木曽川右岸に氾濫し、中山道沿いの太 る美濃加茂市は、洪水の常習地帯でした。 中 からぬ被害を与えていました。

ると、隣村と利害関係が対立して争いを起 こすことがあります こうした水害から村を守ろうと堤防を作

堰堤を切り崩ししました。 が多くなりました。 たまりかねた伊瀬村の の田畑に湛水し、作物が根腐れとなること れによって両川からあふれた水は、伊瀬側 間土居と呼ばれた堤防です。ところが、こ 築いて、自村の田畑を守りました。通称百 が増水するため、今泉村では村境に堰堤を 農民は、宝暦六年 (一七五六)、ついにこの 野川が合流するあたりは、豪雨のため両川 今泉村と伊瀬村の村境付近、蜂屋川と木

作る工事を伊瀬側ですること、排水溝の敷 長や岐阜県知事に訴えを繰り返しています。 は近代に入ってもしばしば起こり、加茂郡 しかし、この百間土居をめぐる両村の対立 の条件で、同年六月、両村は和解しました。 地米として伊瀬は年八斗を今泉へ渡すこと い二尺とし、湛水を排水する樋や排水溝を ちの努力により、堰堤の高さを従来より低 辺の庄屋に調停を委ねました。この庄屋た は、伊瀬側にもいい分ありと認めたのか、周 今泉村の訴えを受けた尾張藩の役人たち

朝廷にも献上された蜂屋柿

現在の蜂屋町です。平安時代から干柿とし とから、「堂上蜂屋」とも呼ばれています。 て珍重され、古くから朝廷に献上されたこ 美濃加茂の特産品、蜂屋柿の原産地は、

伝があります。以来、蜂屋柿は時の権力者 の称号と寺領一〇石を与えられたという寺 代将軍足利義稙に蜂屋柿を献上し、「 柿寺_ 林寺では、開山仁斉宗恕が、室町幕府一〇 文明年間 (一四六九~八七)、蜂屋村の瑞



ようになりました。特 に献上するのが習慣の ら明治維新までは、そ に、豊臣秀吉の時代か

開始し、一日五〇往復、約四〇tの輸送が

したのが、太田の渡。明治三五年には運行

可能になりました。

騨川に青柳橋が架橋。昭和四年には太田橋

同四四年には、

四六年には、 中濃大橋、同

新青柳橋が架

橋されるなど、

岡田式渡船に先立つ明治二四年には、飛

蜂屋村に対して、 れたほどです。 諸役免除の特権が与えら の上納と引き替えに、

出品され、高い評価を受けています。 明治時代には世界各国の万国博覧会にも

近代化と美濃加茂事件

は凶作とデフレ政策による農民の窮乏があ は珍しい政治暴発事件であり、その背後に 後には鎮圧されました。 これは美濃加茂で 山にこもり石で防塁を築きましたが、数日 濃加茂事件が発生。一時は山之上村の富十 同様、明治一七年に地租減免を要求した美 ぐる武力行動が発生しています。 この地も 租改正を制定すると、全国で地租減免をめ れました。政府が近代国家確立のために、地 茂市は名古屋県に所属後、岐阜県に統合さ 近代化に励む明治時代になると、美濃加

通はまったく姿を消しました。

市民が主人公のまちづくり

工するに及んで、木曽川、飛騨川の河川交 所が完成、同一四年に木曽川今渡ダムが竣

た。また昭和一二年に飛騨川、川辺発電

送へと移りま

た渡船は、陸

すすむにつれ、

鉄道の敷設が

あれほど賑っ

道路の整備や

渡の革命、岡田式渡船

只治でした。岡田は多年の研究を積み重ね いました。この窮状を打開したのが、岡田 による川越えにはさまざまな不便が生じて 荷馬車による輸送も増加し、洪水時、渡船



た結果、渡船に改 を極めました。 街道を往来する人々が増え、 明治三〇年頃になると、太田の渡は混雑

> 端工場の都市が進出しています。 良さが全国からも高い注目を集め、近年、先 網は着々と整備され、こうしたアクセスの き、現在の美濃加茂市が誕生。市内の道路 昭和二九年には、町村合併促進法に基づ

しています。 が心豊かで優しくなれるまちづくりを推進 の複数の部署が連携をとりながら、だれも 境」の三つのテーマを柱とし、市民と市政 で、「街に元気」「人に優しさ」「暮らしに環 のまちづくり」を基本としたプロジェクト 第四次総合計画を策定。これは「市民参加 平成一二年には、市民の声を基本とした

参考文献

『美濃加茂市史』

『市民のための美濃加茂の歴史』 平成七年美濃加茂市教育委員会 通史編昭和五五年美濃加茂市

|美濃加茂・坂祝地区激特事業誌| 岐阜県地名大事典。 平成二年木曽川上流工事事務所 角川書店

●昭和58年9月28日/飛騨·木曽川上流域降

金山町(飛騨川)

付知町(木曽川

10 11 12 13 14 ・ 岐阜地方気象台編『岐阜県災異誌』による

中津川市(木曽川)

度重なる水害の歴史でもありました。 豊かな水の恵みを受けてきた美濃加茂市の歩みは、 木曽川水系や長良川水系の大小河川が走り、

昭和四三年の八・一七災害では 昭和三四年の伊勢湾台風、 そして昭和五八年九月二八日に襲来した台風は、 大きな被害が発生しています。 この地に未曾有の被害をもたらしました。 こうした水害を防御するために、同年激特事業を実施。





消防団員により救助される被災者

猛威をふるった、水害の歴史

昭和五八年九月二八日、未曾有の大出水を 木曽川と飛騨川が合流する美濃加茂市は、

の北部地域を中心に死者七名、床上床下浸水 家屋四〇九戸と大きな被害を受けています。 ハス転落事故で知られる八・一七災害では、市 六名、全半壊六六九戸、昭和四三年、飛騨川

> 分頃には、犬山水位観測所で計画高水流量 害に見舞われました。 の区間から溢水氾濫した洪水によって大災 祝町ではいずれも弱小堤防であったため、こ となり、木曽川中流域の美濃加茂市及び坂 (一二 五○○㎡/s)を大きく越える約 木曽川は次第に増水し、二八日一七時五〇 三〇㎜の強い雨を記録しました。 このため が一層激しくなり、数時間断続的に二〇~ 秋雨前線が活発化。二八日一〇時より降雨 ○○○ ㎡ / sの流量を観測する大水害 木曽川水系の岐阜県美濃飛騨地方では

この災害での犠牲者となりました。 名が避難しました。しかし不幸にも一名が、 田小・中央公民館などへ総数約一 五〇〇 命令第一号~第五号まで順次呼びかけ、太 水の見込みが大きいとの情報もあり、避難 もに増水し続け、建設省ダム当局からも増 で呼びかけました。しかし水位は時間とと 太田小・中央公民館へ避難するよう広報車 の深田・下町地区を中心に避難命令を出し の出水量を参考に、一九時一五分、低地部 美濃加茂市対策本部では、上流域の降雨 ダム放流量の情報を入手、また、過去

水の最も深い地区では四m以上になり、二 の後浸水は、国道二一号・四一号に広がり、 ||||時過ぎには国道二四八号まで達し、浸 に旧中山道筋の地域にまで広がりました。 そ 浸水は深田・下町地区から始まり、次第

景観整備も行なわれました。

中山道にふさわしい歴史的な景観を生かした

街を泥海と化す大災害となりました。 たらした大雨により、日本ライン下りの起点 もたらした九・二八災害は、台風一○号のも 木曽川の水があふれ、一瞬のうちに市の中心 として知られる美濃加茂市の最南端を流れる

古くから水害常習地帯でした。 また、昭和三四年の伊勢湾台風では、死者

災害のあらまし

昭和五八年九月、台風一〇号の接近によ



AREA REPORT



流された車



堤防天端を利用した遊歩道



『忘れ得ぬ9~28災害災害誌』

昭和六二年美濃加茂市

。美濃加茂盆地における中村累層の地層と化石』

平成七年美濃加茂市教育委員会

『美濃加茂・坂祝地区激特事業誌』

参考文献

平成二年木曽川上流工事事務所







美濃加茂市島地区特殊堤完成 害救助法が適用されました。

などを兼ね備えた、水辺に親しむ公園とな

この化石林公園の持つ大きな特徴は、「歴

広さ約二 五haで、芝生広場と散策道

部並びに国道等の公共施設を洪水から防御 る計画とし、同地域一帯の市街地及び周辺 五○○ ㎡/ ςに対応する流下能力を確保す 濃加茂市御門町地内を終点とする区間総延 するものです。 長五 六〇〇mについて計画高水流量一二 本事業は坂祝町取組地内を起点とし、

> 九〇〇万年前のサイの足跡ではないかと考え 足跡化石が発見されました。これは、約一 て、やはり木曽川の河床で大型ほ乳動物の

を植えるなどして、自然の景観に近づけて クリート面には石組み模様が施されたり、蔦 もので、築堤工事のうち特殊堤部分のコン 排水樋管一五箇所、橋梁一箇所を新設する 事業の内容は、築堤護岸五、六〇〇m、

る陶壁画が配され、 竣工しました。堤防天端を利用した遊歩道 には、地元小学六年生及び中学三年生によ この激特事業は平成元年五月一五日に、 人々の目を楽しませて

階屋根裏までも水没しました。 そして二九日〇時をピークに二時頃より

くなったものの、市街地は泥沼と変貌しま 水位は徐々に低下。 翌朝までには浸水はな した。 この災害により、美濃加茂市には災

激特事業の概要

開園しました。

進めていた「化石林公園」が、一三年四月に

丁目の太田橋下の木曽川河川敷で整備を

平成一〇年度から、美濃加茂市が御門町

歴史的遺産に恵まれた化石林公園

連区間の整備も合わせた大規模な改修事業 事業費が二百億円にも達する大事業で、 年度より、木曽川上流工事事務所により、抜 事業 (以後、激特事業)を採択。昭和五八 けました。このため、美濃加茂市・坂祝町 坂祝町では、この大出水で大きな被害を受 として進められました。 本的な改修事業が行なわれました。これは、 において、直轄河川激甚災害対策特別緊急 無堤に等しい状況にあった美濃加茂市や

> 床から多数の直立樹木化石群(化石林)がこ です。平成六年の異常渇水の際、木曽川河 史的遺産に恵まれた公園」であるということ

で確認されました。

美濃加茂市では、化石林の発見に前後し

で貴重な化石とされています。 数において日本有数。 太古の環境を探るト た。しかもここで確認された化石林はその るなどの注目すべき地層でしたが、一連の発 近を移動していたことがうかがわれます。 られており、この発見から太古の昔、大型ほ 見によりますますその重要度が高まりまし 乳動物が美濃加茂付近に棲息して、水辺付 僧は、以前からさまざまな化石が発見され 木曽川の川床に広がる地層である中村累

軽に学習できる施設として、公園を整備し そこで、この化石を身近で感じながら、気

をしのぶこ れており、 石畳も残さ 渡船場跡と ました。こ た江戸時代 水運で栄え こには太田

化石林公康

ともできま

AREA REPORT

澄みきった青空を映して、豊かに流れる。

雨雲が広がる空を眺め、旅人はあてどのない時間を語りあかした。

この美しい川も時には牙をむき、中山道を行く旅人の足を止めた。

満面に笑みを浮かべた木曽川は

宿場町をぶらり散策

た

今を旅する人々を温かく迎えてくれる。

安藤広重が、播隆上人が、心を寄せた太田宿はまた、

文化をそして伝統を育んだのであろうか

このゆるやかな時の流れが、

か一時間。かつて中山 用して名古屋からわず 現代なら、自動車を利 難所の一つ。しかし、 われたほど、中山道の 道や木曽川水運の要衝 「木曽の棧、太田の渡 」。太田宿は、こう歌 碓氷峠がなくばよ



いるのでしょう。そんな手軽さも、太田宿 用してもわずか一時間内。 こうした手軽さ ではしばし、おあずけ。安藤広重や播隆上 が、美濃加茂市の新しい魅力につながって ドライブが苦手な人なら、名鉄やJRを利 アクセス抜群の街です。 見知らぬ土地への として発達した美濃加茂市は、やはり交通 人が歩いた道を、 ぶらりと散策してみまし

播隆上人に帰依した脇本陣・林家

を果たした念仏行者の播隆上人。文政九年 一八二六)のことでした。 日本山岳史上、壮挙といわれる槍ケ岳登頂

の著「日本アルプスの登頂と探険」によって日本 英国人ウィリアム・ガラウンドが槍ケ岳に登り、 アルプスの名は世界に広まりました。 ついで英国人ウォルター・ウェストンが登頂、そ 明治になると日本アルプスの命名者である

は槍ケ岳に初登頂、その二年後に仏像を山頂 に安置して槍ケ岳の開山を成し遂げたのでし そのウェストンに先立つこと六六年前、播降

> の時の播隆の心情がいたいように伝わってきま 後に墓碑とともに建てられた歌碑から、そ 世の人の恐れはばかる槍の穂 やがて登らんわれに始めて

陣を代々務める林 が、太田宿の脇本 な信者であったの 依者であり、熱心 その播隆の帰

定所や庄屋をはじめ、味噌しょうゆの製造販 家の当主、林市左衛門です。林家は尾張藩勘 支えていたのでしょうか。 その豊富な財源は、播隆の山への尽きぬ想いを 売、質屋なども営む地元きっての有力者です。

がその綱にふれることで、仏との縁を結ぶこ は、仏像の手に綱をかけて長く引き、参詣者 が槍ケ岳の山頂にかけられました。 善の綱と 八三〇~四四)。この時、ワラで作った「善の綱」 よって刻まれた石碑が五基、残されています。 展開。美濃加茂には「南無阿弥陀仏」と播隆に し遂げた播隆はその後、美濃を中心に布教を 文政一一(一八二八)年に槍ケ岳の開山を成 播隆のその後の槍ケ岳登山は天保年間(



も天保 年間は、 あたか 代の三 八飢饉

> 川之 上町中之番の播降名号碑 代。こういう厳しい時 天保の飢饉があった時 代だからこそ、播隆は

生涯を終えました。 く、念仏の声とともに眠るがことく五九年の 林家に倒れ込むようにたどり着くとまもな 登頂を決行した播隆は、念願を果たした後、 のために鉄鎖を設けるべく、六回目の槍ケ岳 〇)、山岳信仰修験者 仏」を唱えたのでしょ 向かい、「南無阿弥陀 命を削るように山に 天保 一年 一八四

ることがありません。 移しました。その供養墓碑は今も香煙が絶え り、後年、弥勒寺廃院とともに墓を祐泉寺に 林家では播隆の死を悼み下町の弥勒寺に葬

慈雨をふらせた福田太郎八

当主、福田太郎八は、 ら、太田宿本陣三代目 唱え、庶民を俗世の苦 したのが播隆上人な しみから開放しようと 「南無阿弥陀仏」を



雨をもたらした人物です。 ため池や新田を開発して、 庶民の暮らしに慈

に連なる河岸段丘に、太郎洞池や加賀池、御 の酒造業、米穀商を引き継ぐと、太田村の北 父の死後、太田宿本陣、総年寄、庄屋と家業 天保五年(一八三四)に生まれた太郎八は、

> たからです。 ながらも、干害に苦しむ日々を繰り返してい 水として利用できず、満々たる水を目前にし が流れているにも関わらず、その地形から用 しました。太田村一帯は、木曽・飛騨の両川 手洗池などの灌漑用ため池の改修工事に着手

六六)までにそれぞれ完成させました。 代借用。 莫大な私財を投じて慶応二年(一八 ず用地交渉からはじめ、金五〇両をもって永 池を四倍まで広げる大規模な工事。彼は、ま の拡張に着手します。しかし、これは従来の 手。そして元治元年(一八六四)より太郎洞池 太郎八はまず加賀池・御手洗池の改修に着

移住させ、これを開墾させて自立の道を開き より凶作に苦しむ農民を自己所有する原野に 藩の要請を受けて、武儀郡牧谷(現、美濃市) ました。 また、明治二年(一八六九)には尾張 し、八方を尽くして堤防を守り、事なきを得 も顧みず、人足を引率して工事現場に急行 慶応元年に暴風雨が荒れた時、自宅の浸水を 太郎八はことのほか工事に心血をそそぎ、

歳で亡くなりました。 は、明治一一年(一八七八)、働き盛りの四四 その生涯を駆け抜けるように走った太郎ハ

れ、今なお 郎八神社と れています から敬慕さ 地域の人々 して祭祀さ 死後、太

旧太田宿本陣門

正眼寺開山忌 10月12日



般に「妙心寺奥の院」と呼ばれる臨済宗妙心寺派の禅道場。歴 代の政財界人や元巨人軍監督川上哲治氏をはじめ、プロ野球の監 督や選手たちが訪れることで知られています。毎年10月には、盛 大に開山忌が行なわれます。

気ままにJOURNEY

見たのかもしれかもしれません。また、元治

宿を通りますが、幼い逍遙も華やかな行列を 皇女和宮が徳川家茂に嫁ぐため、中山道太田 川の浮舟を背に、旅人 が生まれました。 する文学者、坪内逍遙 太田宿に、明治を代表 がのどかにくつろいでい こんな光景が残る

こに広がる太田の渡の風景は、

穏やかな木曽

安藤広重が描いた、木曽海道六拾九次」。こ

逍遙が残した文学の灯火

す



太田虚空蔵堂前(左から3人目 坪内逍遙・4人目 セン)

きました。

きくなってえらい人になれよ」と言葉をかけて

行の中から中年の武士がつかつかと近づいてき 斎の一隊が太田宿を通過した時には、突然 元年(一八六四)、水戸天狗党の浪士武田耕雲

幼い逍遙の頭をなで、「坊は侍の子か、大



椿の実で遊ん げました。 の歌を詠みあ かしんで二首 だ幼い日を懐

祐泉寺

遊びをしたり、深田の天神神社境内にあった す。とはいえ、逍遙は木曽川の深田の御岩で水 の動乱は大きな足音をたててやってきたので は漢籍を習って、文学的な素養を身につけてい 椿の実で「木の実振りっこ」という遊びに夢中。 方で、母から絵草子や百人一首を、兄から 逍遙が幼い日を過ごした太田宿にも、幕末

ークスピア研究など、その活躍ぶりは、 小説の理論書である。小説神髄』の刊行やシ 京開成学校(東京大学の前身)へ。 以後、近代 逍遙はその後、名古屋へ居を移した後、 、誰しも

円熟期を迎えた明治四五年と大正八年には太 に想いを寄せていたようです。 文学者としての しかし、そんな中でも逍遙は常にふるさと

田を訪問。 Ш

屋小学校からの います。 また、 蜂 碑が建立されて

依頼で作詞をし

に歌い継がれています た校歌は、今も児童たちによって元気りつぱい

って「坪内逍遙顕彰会」が発足。 会員たちの力 によって、生家のあった太田小学校校庭に逍遙 昭和三一年には、逍遙をしのぶ人たちによ

環として「坪内逍遙大賞」もスタート。 美濃加 の灯火は、後輩たちの手によって大切に受け継 茂に生まれた近代文学の祖、坪内逍遙の文学 また、美濃加茂市制四〇周年記念事業の

> 本を代表する偉人たちを世へ送り出したので た太田宿。その人々の交流が文化を育て、

寺に残されています。

多くの旅人が行き交り、しばしの休息を得

日

のでしょう。その志賀重昂の墓碑も、ここ祐泉 える犬山城が、ライン河の風光を連想させた をかむ奔流、沿岸の奇岩、そして厳上にそび て、これを「日本ライン」と命名しました。 がヨーロッパのライン河に優とも劣らないとし 下りを楽しんだ時、太田から犬山までの風景 地理学者の志賀重昂は、講演会を終え木曽川

心地よい木曽川の調べとともに

周辺を一巡すると、播隆上人の墓碑や北原白 す。昔と変わらぬ川のせせらぎを聞きながら、 をはじめ、さまざまな碑が立ち並んでいます。 秋歌碑、松尾芭蕉の句碑、坪内逍遙歌碑など 求めた祐泉寺は、五百年の伝統を誇る古刹で 街道を行く旅人たちが、安息のひとときを は、この二首の歌

語っています。

大正二二年、

加茂郡教育委員会に招かれた

この歌碑の多さが、太田宿の文化や伝統を物

岩

公園が整備されました。

は、今日も優しい笑み んさんと浴びる木曽川 ょう。秋の陽ざしをさ を浮かべていました

日へつながっていくのでし の自然の息吹こそ、 地よく響いています。こ 曽川のせせらぎが、 しょう。そして彼らのかたわらには、いつも木 明



EVENT INFORMATION 美濃加茂市

蜂屋柿品評会 消防出初め式

市民マラソン 3月 小山観音初午祭

4月

・山之上十二社神社祭礼

・諏訪神社祭礼 ・日本ライン川祭

・春まつり ・あじさいまつり

5月 ・体育協会大会

ミスコンテスト

6月 ・ホタルコンサート

11月 ・産業祭 文化.

> · 市民音楽祭 ・市美術展

ちょうちんまつり

弁財天まつり 森山夏まつり

盆踊り

・姫行列

10月

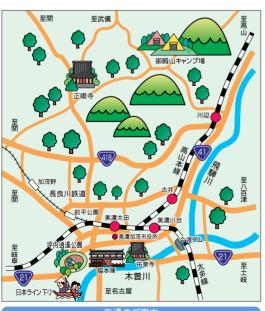
七夕まつり

花火大会

・市民運動会

・荒薙教大祭

伊深正眼寺開山忌



名古屋方面からお車をご利用の方 —— —— —— 名神高速道路 名古屋方面から公共交通機関をご利用の方 美濃太田 JR**高山本線(約**40**分/特急)**

美濃加茂市役所 〒505-8606 美濃加茂市太田町3431-1 TEL0574-25-2111

気ままにJOURNEY 6



その座を大垣湊に譲り渡すことに 揖斐川水系の川湊、濃州三湊を保護・奨励 江戸初期、木曽三川の水運を掌握した尾張藩は 物流の拠点として重要な役割を果たしていました。 大垣湊は、昭和時代に入り、鉄道や道路に主役の座を引き渡すまで 自然条件の悪化や大垣湊の発展により、 時は、西濃地方の流通の中心地として発展を遂げましたが

揖斐川水系の舟運の始まり

揖斐川の舟運の始まりは中世

と呼んでいました。 日村)を西山筋、薮川流域を根尾・外山筋 ていたようです。 そのため久瀬川流域 (坂 尾川)と合流、これより呂久川とも呼ばれ 上流を久瀬川と呼び、上岡島で粕川と合流 内・藤橋・久瀬村)を北山筋、粕川流域 (春 して揖斐川となり、さらに南下して薮川(根 岐阜県藤橋村の冠山を水源とする揖斐川 西濃地方を流れる大河です。かつては

(一五九四) になると、 ばれた通過税が課せられるように る物資に対して、「六分一役」と呼 時は久瀬川といった) 上流部を下 家臣古田兵部により、揖斐川(当 思われます。その後、 天正八年 (一五八〇) の記録によ なりました。 久瀬川を下る物資は、 んだ舟が上がり下がりしていたと 呂久と桑名の間を物資を積 豊臣秀吉の 文禄三年

っても、尾張藩が税を徴収でき どは、大垣藩領。他の藩領であ ŧ 制度は、江戸時代に入ってから たのは、江戸初期、尾張藩が木 税額の規定です。この 及び舟荷に対する徴収 組んだ筏、段木 (燃料) 六分一役とは、材木を 材木・薪炭・舟荷など。 しかし、久瀬川流域のほとん そのまま受け継がれました。

牧田川

曽 Л

美濃路

税を課していました。 ところで、六分一役を課す役

揖斐川を下る物資すべてに通過 知行地の支配関係に関わらず、 曽三川の水運権を掌握したため。

濃州三湊と九里半街道 〔松田千晴氏 作成

はす 柏原

対田

九里半街道

関ケ原

(1) かき

船附

岐阜六ヶ村 長良三郷 上福寺真福寺中福寺 上有知 勝山川 揖斐川慧 曾木 *** 牧田川

多く、したがって舟運の利用率も小島川の たためです。なお、流水量は小島川の方が 村の境あたりで、伊尾川と小島川に分かれ 所も置かれたのは、揖斐川が北方村と房島 が、このようにごく近い場所に役所が二箇 の役所は、 斐川町房島) に置かれていました。これら 揖斐郡大野町南方)、後者は房島村 (現、揖 分一役所」の二つがあり、前者は南方村(現 所には、「伊尾川六分一役所」と「小島川六 方村 (現、 揖斐川町北方) に移されました 後に島村 (揖斐川町島) 及び北

方が高かったようです。

物資流通の中心となった濃州三湊

中心地でした。 は濃州三湊と呼ばれた川湊で、物資流通の 笠湊、船附湊を保護下に置きました。 これ 合流しようとする地点に並ぶ、烏江湊、栗 尾張藩は、 江戸初期、木曽三川の水運権を掌握した 揖斐川中流、牧田川が揖斐川に

中では、牧田川と揖斐川の落合に位置する 国を結ぶ重要な商品の流通路。この街道を 船附湊が、上りの物資を最も多く取り扱っ 担うようになりました。 なお、濃州三湊の ちろんのこと、全国的な流通機構の一翼を 州三湊は濃尾平野の中心地であることはも 経て琵琶湖の舟運と結びつくことにより、濃 朝妻湊を結ぶ九里半街道は、東国と西国北 ていました。 この三湊から牧田、今須を経て琵琶湖の

新たに台頭した大垣湊

「古来大垣に集散する総ての物資は、殆ど皆 られるように、大垣藩の城下町経営には重 要な役割を果たしていました。 此の水運に依りたるものなり」と文献に見 れた水門川に発達した川湊が、大垣湊です。 永禄四年 (一五六一)、揖斐川から開削さ

戸村重助、赤坂村弥平兵衛が船町に移住し、 しょう。水門川の運輸業は慶長年間 (一五 五~二三) になると、池田村番右衛門、木 ぜられました。ついで、元和年間(一六一 た。以後、町役、船役などはこの五人に命 町に倉庫を建て初めて船問屋を創業しまし 次右衛門をはじめとした五人は共同で、船 小型のもの。その後、慶長末になると、与 た。しかし、この頃、大垣湊にあった舟は に、木村与次右衛門・長八両人が始めまし 九六~一六一五)、大垣城主石川康通の時代 ほとんどの物資は、水門川を利用したので に適した航路。このため、大垣に集散する 水門川は流勢も平順であったため、



発達を遂げていきました。 他にも川舟一五艘をもって、運輸業に励み をもって、領主の江戸往復の御用船を勤め ています。以後、弥平兵衛は大型船の二艘 弥平兵衛の功績を賞して彼を船問屋に命じ もたらしました。この時の城主松平忠良は 垣出入りの物資は増加し、この地に繁栄を それぞれ運輸業を始めました。 それ以来、大 ました。このように、大垣湊の舟運は順次

尾張藩と大垣藩の舟運めぐる対立

を上る物資のすべては、濃州三湊で陸揚げ 垣湊の発展を黙認することができなくなっ 垣藩に陸揚げされるようになったのか、大 州三湊で陸揚げされていた物資の多くが、大 って大きな脅威となりました。これまで濃 た濃州三湊は尾張藩に要請し、「揖斐川水系 こうした大垣湊の台頭は、濃州三湊にと

> 内容の命令を、木曽三川流域に位置する尾 とに成功しています。 張藩領の綱場及び川湊に対して出させるこ 他の新しい湊ではこれを禁ず」という

三湊に、尾張藩の権力でもって陸揚げさせ される上流向けの物資は自藩領である濃州 のであり、木曽三川流域の尾張藩領から出 ようとするものでした。 この命令は明らかに大垣湊を意識したも

かがうことができます。 いうことからも、大垣湊の急速な発展をう 令が出されたのが元和七年(一六二一)と うことを意味しているのでしょう。この命 奪われてしまうという恐れがあった、とい のであり、その発展を黙認すれば西濃地方 ことは、それほど大垣湊の発展が急激なも して出さしめなければならなかったという における物資流通の中心的地位を近い将来 濃州三湊が、このような命令を尾張藩を

どでした。

ていきました。 揖斐川の舟運における中心的な地位を失っ 湊の急激な発展と自然条件の悪化によって、 地位を保とうとしていた濃州三湊は、大垣 こうして、尾張藩の権力を利用してその

大垣湊は、松尾芭蕉の結びの地

留しています。 は、江戸時代を代表す俳人、松尾芭蕉も逗 運の拠点としての地位を確立した大垣湊に 濃州三湊から大垣湊へ。揖斐川水系の舟

下り桑名に向かいました。この時、 で谷木因と親交を深めた後、舟で水門川を 州、北陸を回り大垣に着いた松尾芭蕉は、こ こを「奥の細道」の結びの地とし、船問屋 元禄二年(一六八九)、江戸を出発し、 詠んだ 寒

蛤やふたみに分かれ、行く秋ぞ

関ケ原から大垣まで鉄道を延長した意図も、 水運を利用して伊勢湾と北陸を結ぶ南北交 垣~桑名間に定期便が周航。一八八四年に、 ても失われることなく、一八八二年には、大 こうした大垣湊の繁栄は明治時代に入っ でした。というのも、揖斐川中流、牧田川 は、大垣湊の発展だけにはとどまりません しかし、濃州三湊にとっての不利な条件

合流点付近では、河川の天井川化という自

っていましたが、出水のたびに土砂が押し 流されてきて、干水時には舟が通れないほ れを打開するため、時折、浚渫作業を行な に支障をきたすようになっていたのです。そ くなりつつありました。この変化が、舟運 端部近くにあり、土砂が堆積して川底が浅 然条件の変化が起きていたためです。 そもそも濃州三湊は、牧田川扇状地の末

地位を保つことはおろか、川湊としての機 能を果たすことすら、難しかったのでしょ このような状況では、物資流通の中心的

通を促進するためでした。

名に潮干狩りに出た舟が最終便となりまし になると舟運も衰退。一九五〇年ごろ、桑 しかし、鉄道や陸上交通が発達し、昭和

『岐阜県林業史』 参考文献

『新編大垣市史』 ~ 中巻美濃国編~ 一九八五年岐阜県

『木曽三川流域誌』 一九九二年建設省



びる古屋市 (名古屋市)

(名古屋市緑区)

用は参加者の負担です。いかがでしょ 画していただきたい。 もちろん、全費 を募って、バス日帰りか一泊の旅を企 ISSO」読者から同地の見学希望者 河川環境管理財団のお骨折りで、「 K 盛山に発しているようで、奥木曽湖が 料館) があるようですね。できるなら あり、木曽川源流ふれあい館(ダム資 地図を見ていたら木曽川の源流は鉢

JOE 2

今 井

守さん (中津川市)

交通に従事した人々の実態もぜひ知り います。木曽川上流地域の紹介や河川 との関連もお願いします。 ム建設、森林鉄道、トラック輸送など たいですね。 河川交通による流通とダ 「河川交通とその歴史」、期待して

今後の参考とさせていただきます。 貴重なご意見ありがとうございました。

お問い合わせは、KISSO」編集 FAX 052.571.8627

一) はじめに

接携わっていたのが、 ってもたらされたのである。その運搬に直 資 (調味料や焼物等) は上流域へ、舟によ 炭等) は下流域へ、下流域で生産された物 資の流通に大きく関わっていたのは舟運で の船頭たちであった。 あった。 上流域で生産された物資 (米や薪 陸上交通が発達していなかった時代、物 沿岸に位置する集落

った)流域においても、舟運に携わる集落 在の同郡真正町海老)も、その一つである。 がいくつか見られた。本巣郡弾正村海老 (現 家は少なかった。そのため、多少なりとも 経済的に余裕のある農家や手間(労働力)の 米作りだけで生計を立てることができる農 村地帯とはいえ各農家の経営規模は小さく 近代の根尾川(薮川と呼ばれた時代もあ 根尾川左岸に位置する海老の場合は、農

りしていた。 (六~七軒) に携わった だり、舟を購入して舟運 船頭は元手もかかった んでも、儲けが大きか し、手間もいった。そ

る。しかし、その反面 と、古老は当時を振り返 舟運は事故にあうという

か

相羽

下方

大垣

化で亡くなった船頭も海老の近くにいたと 危険性も含んでいた。実際、伊勢湾での時

端を見ていくことにする。 代の根尾川流域で展開されていた舟運の一 松・杉山徳左衛門の活動に焦点を当て、近 かつて海老で船頭を営んでいた杉山仙

一)遡行終点的位置にあった海老

地を形成しながら南流している。 根尾川は、大規模で傾斜の緩やかな扇状

ている。 が大きい土地柄であるという事情が存在し が、果樹園が広がっている背景には透水性 るとともに、柿や梨等の一大産地でもある その流域は県内でも有数の米の産地であ

巣郡本巣町山口に設けられている。きた。ちなみに、根尾川からの取水口は、 田用水や真桑用水等)が古くから築かれて 生産を維持・発展させるための潅漑用水(席をのため、根尾川流域においては、農業 本

ある農家は、馬を飼って

運送業 (二軒余) を営ん

扇状地を流れる根尾川の水は伏流水とな



が岸に寄ってくるため、船頭は舟の先と綱 の間に竹を取り付け、舟の進行方向が常に を歩きながら舟に付けた綱を引っ張ると舟 原を歩いてこなければならなかった。川原 を付け、船頭がその綱を引っ張りながら川 用するために帆を上げた。しかし、帆に適 上流に向かうようにしていた。 した風が吹いていないときは、舟の横に綱

った。 ため、 夏季にはしばしば干上がることがあ

集落は海老辺りが最上流部(遡行終点)に なっていたと考えられる。 その結果、年間を通じて舟が往来できる

とする三水川は一年間を通して渇水するこ

牛洞(現在の同郡大野町牛洞)の湧水を源 尾川はしばしば渇水したが、揖斐郡西郡村

三) 舟の構造と係留場

四)海老から桑名への物資

海老には、近在の人々から甕屋と呼ばれ

川の土手に打ち込んでおいたそうだ。 るときは、先端が四つに分かれた錨を三水 とがなかったからである。なお、舟を留め

なっていた。 根を葺いた。また、舟の最後部は舵取場と 防ぐため、板や葦のコモを組み合わせて屋 という。雨天の場合は物資が濡れることを の樽なら、二 ~三 程積むことができた 味噌やタマリ(味噌の中から採った調味料) ろには帆を立てるための帆柱があり、その の物置と呼ばれる場所があった。物置の後 頭が睡眠をとったり炊事をしたりするため という規模であった。舟の先端部分には船 後部は物資を積むための場所になっていた。 んでいた) は、全長4~5間・深さ3尺余 海老の船頭が所有していた舟 (鵜飼と呼

依頼されたり購入したりした農作物(米や

ようである。仙松は、海老周辺の農家から の荷があるときには農繁期でも舟を出した 運に携わって現金収入を得ていたが、急ぎ からきている。仙松は、農閑期になると舟 の祖父仙松が行っていた船頭としての屋号 る杉山善夫家がある。この呼び方は、善夫

麦)を舟で桑名(ときには名古屋)まで運

搬していた。

徳左衛門は農作物の他に、根尾谷から馬

舟が下流から上ってくるときは、風を利

支流で西側を流れる三水川に留めていた。根 海老の船頭たちは、普段は舟を根尾川の



松田

1955年(昭和30年)岐阜市に生まれる。 を経て、現在は白川町黒川小学校勤務。 『木曽三川流域誌』建設省中部地建 平成4年)に執筆他

千晴

五)桑名から海老への物資

(現在の大垣市赤坂町)で俵に詰めた石灰を 斐川に入り、杭瀬川を上って不破郡赤坂町 材料)を桑名まで運搬した。

また、海老には、一旦根尾川を下って揖

を天日干しするための稲架・土壁の下地の の丸太で燃料にした) や海老周辺の竹 (稲 車で運ばれてきた薪炭や段木 (長さ三尺余

積み込み、桑名に運搬する船頭もいた。

桑名から海老に帰ってくる船頭は、桑名

TALK & TALK



噌やタマリ の場合は味 る船頭もい 分で販売す るように自 て、後述す きた。 そし 徳左衛門

ってきた を積んで上

安八郡結村 (現在の同郡安八町結) から蒿 や同村相羽 (現在の同町相羽)の味噌・タ 揖斐郡大野村下方(現在の同郡大野町下方) この藁灰は秋前に運搬し、麦を蒔くときの 灰を運搬してくることもあった。 ちなみに マリ屋に卸していた。また、知合いの農家 八郡今尾村 (現在の海津郡平田町今尾) や に依頼されたり自分で購入したりして、安

焼く燃料となる石炭を運搬してきた。 石灰を運搬した船頭は、帰りには石灰を

六) 甕屋の商売

品を扱う店は根尾川左岸では甕屋のみであ は見られたが、桑名から運搬してきた上等 海老周辺において味噌やタマリを扱う店

在の同郡北方町加茂)辺りの、経済的余裕 の同郡糸貫町石神)・本巣郡席田村加茂 (現 木)・本巣郡土貴野村小弾正 (現在の同郡 海老をはじめ弾正村浅木 (現在の真正町浅 のある人々であった。 糸貫町小弾正)・本巣郡「色村石神(現在 甕屋から味噌やタマリを購入したのは、

> って味噌やタマリを配達する際に手伝って 昭和五~六年頃、善夫は仙松が荷車を使

「甕屋の味噌やタマリは (上等な味で)、 っぺん飲んだらやめられん」

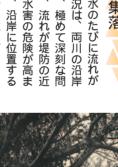
のだろう、と善夫はいう。 という言葉をしばしば耳にしていた。 近在 長く続けることができる要因になっていた にはない商品を供給していたことが船頭を

七) 船頭と沿岸の集落

するように努めていた。 したりして、水害の危険を少しでも小さく ようにしたり、石を詰めた蛇篭を川の中に るからである。そのため、沿岸に位置する 題であった。なぜならば、流れが堤防の近 変わった。このような状況は、両川の沿岸 入れることによって堤防の土を守るように によって川底の土がそれ以上に削られない 集落は、流れが激しい場所に杭を打つこと くに寄ると土が削られ、水害の危険が高ま に位置する集落にとって、極めて深刻な問 根尾川や揖斐川は、出水のたびに流れが

人々の間に、 しばしば対立が起こっていた 運に携わる船頭たちと集落を守ろうとする で、舟の通り道になっていた。そのため、舟 れられる場所というのは水量が豊富な箇所 ところが、杭が打たれる場所や蛇篭が入

航運社を設立して、揖斐川下流部の流れを である。しかし、明治四二年当時、舟運の が、杉山善夫家に残されていた。 起きていた。そのことを示す史料「社団法 が脅かされるとして船頭が反対する事態も や蛇篭を設けようとする場合があり、生活 便を図るという名目のもと社団法人揖斐川 うな性格の組織であったのか、どのような 人々が関わっていたのか、詳細は一切不明 入揖斐川航運社の計画に対する反論」(仮称) 社団法人揖斐川航運社なるものがどのよ また、水害に対する予防措置以外にも杭



在の同郡巣南町川崎)及び海老の船頭たち この動きに対して、本巣郡川崎村七崎 (現

料を支払うことは不可能である。 る船頭が、社団法人揖斐川航運社に行诵 舟に乗ってわずかの現金収入を得てい

川の流れというものは出水のたびに変わ って舟による往来が困難になる。また、 的には舟の往来の障害となる。 るため、箕猪子や柳蛇篭を入れると将来 川幅が狭いため、工事を実施するとかえ 工事が計画されている場所はもともと

自然的なもの人為的なものを問わず、 しば障害が発生していたようである。 という三つの理由をもって反対している。 船頭が舟で生計を立てるにあたっては、 得ない物資の流通にとっても不利益なも

ものであるとともに、舟運に頼らざるを

今回の計画は、船頭にとって不利益な

ハ) おわりに

いた仙松は、昭和一 比較的遅くまで根尾川の舟運に携わって 年頃まで船頭を続け

改修しようとする動きがあったようである。

(明治一九年生 善夫の父親)が養蜂業に携 なっていったという。 乗る人が甕屋にはいなくなってしまった。そ なり、在庫を処分していくだけの先細りに のため、桑名での商品の仕入れが不可能と わっていたため、仙松が高齢になると舟に ていた。しかし、仙松の息子である善三郎

原因は、昭和初期に始まった木曽川上流部 できなくなったのだという。 た。改修工事のために、舟の自由な往来が 陳情書を提出し昭和一七年に竣工)であっ の河川改修工事 (大正一五年に国庫補助の い段階ですでに舟運から離れていた。その ところが、他の船頭たちは、甕屋より早

わっていったという。 ていたが、やがて壊されて塀の材料等に変 は、その後しばらくは三水川に浮かべられ たという。なお、舟運に使用されていた舟 生計を立てることは難しい状況になってい り後継者に恵まれていた船頭でも、舟運で 始めていた。そのため、甕屋の場合と異な しかも、この頃になると自動車が普及し

三六年生)・杉山善夫氏(大正六年生)に 大変お世話になりました。 ここに感謝の意 本調査にあたっては、杉山正美氏 (明治



本巣郡真正町海老の甕屋に今も残る楠の老木



木曽川文庫利用案内



《開館時間》午前9時~午後4時30分

《休館日》毎週月曜日·祝祭日·年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分 名神羽島I.Cから車で約30分 東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・ 木曽川文庫 〒496-0947 愛知県 海部郡立田村福原 TEL(0567)24-6233



編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを 企画しています。身近で起こった出来事、地域の情報など をお知らせください。

宛先 「KISSO」編集 FAX.(0567)24-5166

今号の編集にあたって、美濃加茂市のみなさん及び松田 千晴氏に大変お世話になりました。お礼申し上げます。 次回は、上石津町を特集します。

木曽川文庫ホームページ

http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp

表紙写真

上:木曽川河床の化石林(金子郁朗氏撮影) 下左:太田脇本陣林家住宅(国・重要文化財) 下右:日本ライン下り

『KISSO』Vol.40 平成13年10月発行

発行: 国土交通省中部地方整備局木曽川下流工事事務所 〒511-0862三重県桑名市播磨字沢南81 TEL(0594)24-5715

木曽川下流工事事務所ホームページ URL http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu

制作:財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル) TEL(052)565-1976